参考文献

川原篤志・川原綾太郎・布村昇・宮本望・邑本順亮（2005）富山県朝日町の海産貝類相．富山の生物44：55-62.

宮本望・高山茂樹・邑本順亮・布村昇（2000）蛇ケ島の貝類富山の生物．39：41-56.

宮本望・高山茂樹・邑本順亮・湊洋平・瀧口景子・北浦清・布村昇（2002）石川県七尾市黒崎貝類．富山の生物41：15-33.

宮本望・布村昇（1999）富山県高岡市雨晴産海産貝類，富山市科学文化センター研究報告22：39-53.

布村昇編（1988）富山と能登の貝．富山市科学文化センター収蔵資料目録2：1-128.

布村昇編（1997）菊池勘左エ門貝コレクション富山市科学文化センター収蔵資料目録10：1-132.

布村　昇・宮本望・高山茂樹・常石玲子・邑本順亮・北浦清・瀧口景子（2004a）富山県神通川-庄川間の海産貝類相-1．富山の生物43:21-32.

布村　昇・宮本望・高山茂樹・常石玲子・邑本順亮・北浦清・瀧口景子（2004b）富山県神通川-庄川間の海産貝類相-2．富山の生物43:33-46.

北陸の蟹伝説－II．能登町の「蟹の甲石」

本尾　洋

日本海甲殻類研究会　〒924-0026 石川県白山市平木町40

Legendary tales of crabs in Hokuriku district, Japan-II. "Gannoko-ishi"(crab rock) at Noto Town, Ishikawa Prefecture

Hiroshi Motoh

The Crustacean Society of the Japan sea, Hiragimachi 40, Hakusan-shi, Ishikawa 924-0026, Japan

著者は蟹にまつわる伝説に関心を持っており、前回石川県・能美市に伝わる蟹淵の伝説を紹介した（本尾，2007）。今回は石川県・能登町に伝わる大蟹と弘法大師にまつわる話を紹介する。

方　法

平成18年９月22日、石川県能都町の五十里近郊において蟹伝説の残る長福寺を訪れて関係者の話を聞き、かつ大蟹の化身とされる蟹の甲石を視察した。

結果と考察

蟹伝説のある（旧）柳田村字五十里の重年地区は能登半島の奥部中央に位置しており（図1）、2005年３月１日の合併により現在鳳珠郡能登町字柳田ユ部となっている。周囲を山地に囲まれた重年は33軒からなる静かな農村集落である。

現地には車で訪れた。金沢から能登有料道路を経てまず輪島市に行き、そこから日本海を左に見ながら北上し、町野で右折して県道277号線（宇出津町野線）を経由して旧柳田方面に向かった。小一時間かけて能登半島の背骨を越えて能登町に入るとやがて県道26号線（珠洲穴水線）に到達。Ｔ字路を右折して数キロｍ走ると蟹伝説の地五十里地域がある。町野川の上流を渡ると左手前方の小高い丘にお寺が見える。それが目指す「長福寺」であることを、道路脇で道を訪ねた農夫から教わった。同県道を左折して数百ｍ進んで同寺に通ずる坂の入り口に到着。お寺の名を刻んだ石柱を見て、「ようやく着いたなー」と軽い安堵感がこみ上がってきた（図2、左）。

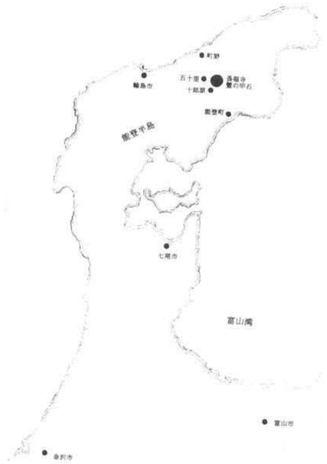


図１．蟹伝説と関連する長福寺と蟹の甲石及びその付近の位置

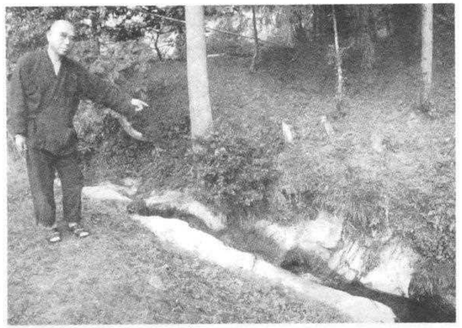
図２．左，長福寺の石碑；右，本堂内の立派な阿弥陀如来（写真日付は９月22日の間違い）

坂を上ってお寺の駐車場に車を停めて、本堂と棟続きの住職のお宅に伺った。丁寧に応対して下さったのは中村義観住職である。訪問理由を告げると応接間に通され、途中から郷土史家の瀬戸久雄氏も加わり、中村住職から蟹の甲石の伝説について以下の内容を伺った。

その昔、寺の近くの珠洲街道の「和郎が谷」に大きな蟹が小童に化けて住んでいた。蟹は夜な夜な街道を行き来する通行人に危害を加えた。人々はすっかり困り果て、丁度この地方に来られた弘法大師に蟹を懲らしめてくれるようにお願いした。そこで大師は錫杖で大蟹を一打ちし、近在の十郎原部落から拝借した烏帽子をかぶせて近くの淵に沈めて成仏させた。蟹は烏帽子と共に大きな石（岩）となった。そして、祟りがないように、蟹は雨の神として祀られた。その折、干魃時の雨の降らせ方を記した書き物を長福寺に預けた、との言い伝えが残っている。ただ、残念ながら長福寺はその後焼けているので書類は現存していない。現在のお寺は文化３年（今から202年前）に再建されている。

お話の後、真言宗の古刹である長福寺の本堂に案内された。そこには座高93cmの阿弥陀如来の座像はあった（図２、右）。850年前の平安時代の古い木造とのことで、本尊として安置されている。

仏像を拝観した後、中村住職の車で大蟹が出没したという伝説の現場に向かった。町野川の支流重年川沿いに続く細い山道の１km余りを十数分かけて行くと一角にブルーベリー畑が拡がっていた。その脇に少し広くなった三叉路があり、そこで車を下りた。ここが昔の珠洲街道であり大蟹が通行人を悩ませた場所とのこと。それを聞いて一瞬、遠い昔に想いを馳せた。そこから歩いて畑の縁を100mほど行くと伝説の"蟹の甲石"があった（図３、上）。その場所は石（岩）の手前を湧き水に端を発する小川が流れる"地形"になっている。伝説の石は川底で繋がっているとのことで、全体で長径で３m位あり、その巨大さを実感する。その石に接して下流側に深い淀みがあった（図３、下）。正しく蟹が沈められたという淵である。水飢饉の時、その淵を掘ると雨が降るとの言い伝えが残っており、現在も近郷の十郎原では明神様を祀り、夏には祭事が催されている、と中村住職がおっしゃっていた。この神明宮の奉橙祭のキリコと神輿は蟹に因んで横にかついで走るという（今村，1962a）。人々の水田耕作に欠かせない水確保への強い執念を目の当たりにする想いがした。なお、数年前に川普請がなされており、淵の手前（図３、下）には確かに一部コンクリートの護岸があった。



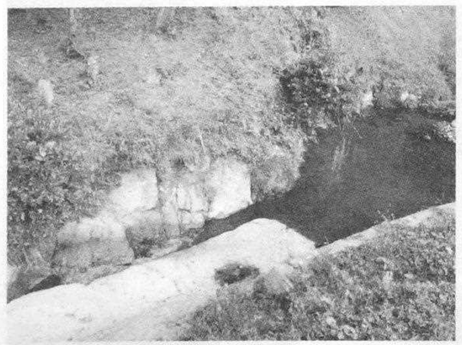


図３．上，蟹の甲石とそれを指さす中村義観住職；
下，蟹の甲石（左向こう側）とその淵（右）

この蟹の甲石の伝説については、幾つかの違い（バリエーション）が見られる。大蟹が人が近づくと雨を降らせ日暮れになると男の子に化けて人を驚かす（中瀬，1989）、通行人に悪さをした（清酒，1975；中瀬，1989）あるいは食った・殺した（今村，1962a；藤島，1984a）、雨の降らせ方を記した祈祷文が長福寺の他に十郎原の日桂社にも保存された（これも焼失．今村，1962a）、十郎原の神様が弘法大師と相談して蟹に烏帽子を与えて埋めた（小倉ら，1956；今村，1978）、更には蟹が出没した場所が金蔵（現輪島市）だったり（清酒，1975）、蟹は弘法大師に和郎が谷で封じ込められそうになったが改心して雨乞いの術を授けられて古巣の金蔵（町野村）に戻って農民にその術を教えて恩返しをしたというハッピーエンドとなる（清酒，1975）等々である。このことは、内容の基本は同一であるが細部の組み立てに４とおりがあるとする指摘（今村，1962a，1962b）と合致する。

思うに、永年各地で言い伝えられてきた民話・伝説にはその間様々な解釈が加味され、内容が"変遷"していくものであり、ストーリ展開の微妙な違いは民衆の伝説への関心の高さと想像力の逞しさを示しものと言えよう。

蟹の甲石伝説には、元々乾田地帯の町野村（現輪島市）と湿田地帯の柳田村（現能登町）の争いが背景にあるとされ（今村充夫，1962a，1962b）、実際現地では竹槍利鎌を振るって攻防した（今村，1962b）とか、明治16年（1883）７月３日金蔵村、柳田村双方に傷つき倒れる者が続出（今村１，1962b）、昭和元年頃町野と柳田が争った（今村，1962a）ことが記録されている。これは蟹淵（本尾，2007）における下流の鍋谷部落の水確保に絡む伝説と類似した内容である。

「蟹甲石」譚は水の主を大蟹とし、そこに雨乞い信仰が挿入されている（藤島，1984a）のである。このような史実から、潅漑設備の整った現代では想像もつかないくらい、昔の人々は水田耕作にとって命の次に大切な水を確保することに心血を注いでいたことが痛いほど解るのである。

蟹と蛇との対決が多いのは高所に住む蟹と低所にいる蛇との（縄張り）争いであろう、と長福寺でのお話に同席された瀬戸久雄氏が指摘されている。そして同じ蟹でも水の多いところに住むサワガニは善玉、土手や畦に穴を開けるモクズガニは悪玉、との同氏の説明は蟹の生態をうまく捉えていて成程と合点が行く。翻って、昔話・伝説と言えどもその内容は決して荒唐無稽ではなく、幾分なりとも事実に基づいている、というのがその場の３人（中村・瀬戸・本尾）の共通認識であった。

ところで上記の蟹の甲石伝説には次のような前段がある。渇水期に農夫の独り言の願いを聴いた蛇が田に水を張り、後日若侍になって娘をもらいに来た。そして大蟹がその蛇を退治し、今度は自分（蟹）に娘を呉れとせがんだ。しかし娘の父親に拒絶されて蟹はしかたなくその地を離れ、上記の「和郎が谷」に移り住み夜な夜な人間に危害を加えた（今村，1962a，1962b；中瀬，1989）、というのである。この場合、大蟹は150年生きていたことになっている（中瀬，1989）。この話は大蛇に求婚を迫られた娘を救った蟹の話（齣・中川，1976；立命館大学説話文学研究会，1978；小田原，1993）と繋がった内容である。これらは心優しい命の恩人の娘に蟹が恩返しをするいわゆる蟹報恩譚の流れを汲むものであるとされる（齣・中川，1976；大島・常光，1976；藤島，1984b；福田・松本，1994）。

さて、表題「蟹の甲石」の呼び方には「がんのこいし」（藤島，1984a）、「がんのこういし」（今村，1962a）、「がんのこ」（小倉ら，1900）の３とおりがある。本著では中村義観住職のお話や地域住民の俗称に基づいて「がんのこいし」を用いている。関連して、能登地方では一般に蟹をカニと呼ばずガン、ガンチ、ガンチョと呼んでいる（本尾，1974）。

今後も、北陸の地における蟹にまつわる話を基に、現地を探訪して、蟹がなぜ伝説に登場するのかなどを、様々な事例を踏まえて考察して行きたいと思っている。

謝　辞

蟹の甲石伝説についてお話を頂いた上に、現地を案内して下さった長福寺の中村義観住職、同寺で貴重な話を聞かせてくださった能登町文化財保護審議会委員の瀬戸久雄氏、そして日頃から社寺について教示頂いている石川県立歴史博物館の本谷文雄課長に厚くお礼を申し上げます。

引用文献

藤島秀隆．1984a．能登の蟹寺伝承をめぐる諸問題．加賀・能登の伝承，105-148，桜楓社，東京．

藤島秀隆．1984b．蟹報恩譚と蟹淵伝説．加賀・能登の伝承，149-154，桜楓社，東京．
福田　晃・松本考三．1994．蟹満寺縁起．京都の伝説－乙訓・南山城を歩く，49-55，淡交社，京都．
今村充夫．1962a．ガンノコウの話．加能民俗，5(9)：1-4．
今村充夫．1962b．蟹の甲石伝説の要素．加能民俗，5(11)：1-5．
今村充夫．1978．蟹の甲石伝説．生きている民俗探訪　石川，194-196．第一法規出版，東京．
齣　敏郎・中川正文．1976．蟹満寺縁起．日本の伝説－京都の伝説，161-170，角川書店，東京．
本尾　洋．1974．石川県近海産エビ・カニ類の地方名．石川県増殖試験場研究報告，(3)：9-19．
本尾　洋．2007．北陸の蟹伝説－Ⅰ．能美市の蟹淵．富山の生物，(46)：57-61．
中瀬精一．1989．五十里の蟹の甲石．柳田の昔話，6-16，能登印刷，金沢．
小田原利光．1993．蟹満寺訪問記．Cancer，(3)：29-32．
小倉　学・藤島秀隆・辺見じゅん．1956．キリコ祭り．加賀・能登伝説，日本の伝説　12，116-119．
大島広志・常光　徹編．1976．蟹報恩．三右衛門話－能登の昔話－，149-150，桜楓社，東京．
立命館大学説話文学研究会編．1978．蟹報恩．能登富来町昔話集，富来町教育委員会，51-53．
清酒時男．1975．がんのこ掘り．加賀・能登の民話　第２集，日本の民話58，255-258，未来社，東京．

富山湾で獲れたダイオウイカの一種

高山茂樹
魚津水族博物館　〒937-0857 富山県魚津市三ケ1390番地

Records of giant squid *Architeuthis* sp. in Toyama Bay

Shigeki Takayama
Uozu Aquarium, 1390sanga, Uozu-shi, Toyama 937-0857, Japan

ダイオウイカは、無脊椎動物の中では最大の生物で、体長４～５ｍ、体重百数十kgに達する。世界の温帯海域から亜寒帯海域の中・深層域に生息する。これまでに世界各地から15～19種が報告されているが、種の記載が体の一部分で行われていたり、標本として保存もされていないので、それらの分類は混乱が残っている。このような理由から、ダイオウイカの名前は、ツツイカ目ヤリイカ亜目ダイオウイカ科ダイオウイカ属*Architeuthis*に属するイカの総称を指す（窪寺、2000・2002；奥谷1986）。富山湾でも稀に漁獲例があるが、報告例がない。ところが、2007年１月に２例のダイオウイカの一種が富山湾沿岸で確認されたので報告する。

１．富山県射水市新湊漁港水揚げ個体（図１，２）
捕獲日：2007年１月13日
捕獲場所：射水市富山新港沖定置網
大きさ：背外套長　125cm
　　全長　　260cm
備考：午前中にダイオウイカが水揚げされたとの連絡があり、急ぎ新湊漁港に駆けつけた。イカ自体は、すでに死亡し、岸壁のプラスチック製容器の中に保管してあった（図１）。ダイオウイカの表皮は剥がれやすく、この個体も外套部分の表皮が大きく剥がれ落ち、白い外套がむき出しになっていた。輸送後、体を調べた結果、触腕が２本とも欠損していた。また、生殖腕がないのでメスと思われた。

２．富山県高岡市雨晴マリーナに漂着個体（図３）
漂着日：2007年１月22日
漂着場所：高岡市雨晴マリーナ海岸

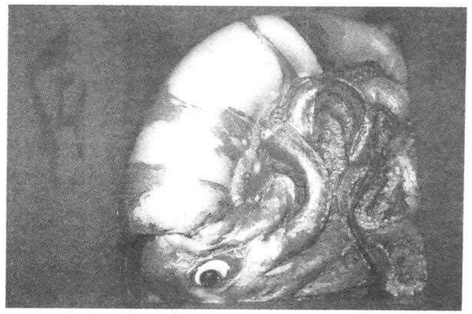


図１　水揚げ後、プラスチック容器に収容されたダイオウイカの一種

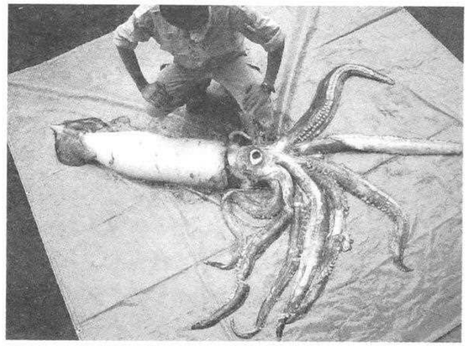


図２　水族館に輸送後のダイオウイカの一種

図３　富山県高岡市雨晴マリーナに漂着個体